

# 愛

岡本かの子

青空文庫



その人にまた逢ふまでは、とても重苦しくて気骨きぼねの折れる人、もう滅多めったには逢ふまいと思ひます。さう思へばさばくして別の事もなく普通の月日に戻り、毎日三時のお茶うけも待遠しいくらゐ待兼ねて頂きます。人間の寿命に相応ふさはしい、嫁入り、子育て、老おいさき先の段取りなぞ地道に考へてもそれを別に年寄り染みた老け込みやうとは自分でも覚えません。縫針の針孔めどに糸はたやすく通ります。畳ぎはりが素足の裏にさらくくと気持よく触れます。黄き菊ぎくなどを買つて来て花器いに活けます。

その人にまた逢ふときには、何だか予感といふやうなものがございます。ふと、たゞこれだけの月日、たゞこれだけの自分では

といふやうな不満が覚えられて莫迦ぼか々々ぼかしい気持になりかけます。けれども思へばその気持もまた莫迦らしく、かうして互ひ違ひに胸に浮ぶことを打ち消すさまは、ちやうど闇の夜空のネオンでせうか。見るうちに「赤の小粒」と出たり、見るうちに「仁丹」と出たり、せはしないことです。するうち屹度きつとその人に逢あふ機会が出て来るのでございます。

出がけのときは、やれく、また重苦しく気骨の折れることと、うんざり致します。逢つて見る眼には思ひの外ほか、あつさりして白いものゝ感じの人でございます。たゞそれに濡れ濡れした淡い青味の感じが梨なしの花片はなびらのやうに色をさしてるのが私にはきつと邪魔になるのでございませう。

その人は体格のよい身体をしゃんと立て、椅子いすに腰をかけ、右膝ひざを折り曲げてゐます、いつも何だか判らない楽器をその上に乗せて、奏でてゐます。普通には殆どほとん聞えません。私は母から届けるやう頼まれた仕立ものを差出します。その人は目もく礼れいして受取つて傍の机の上に置きます。そして手で指さし図ずして私をちやうどその人の真向うの椅子に掛けさせて、また楽器を奏で続けます。その人は何も言ひません。細眼にした間から穏かな瞳をしづかに私の胸の辺に投げて楽器を奏でます。私の不思議な苦しみはこれから起ります。

その人の中には確たしかに自分も融け込まねばならぬ川が流れてゐる。それをだん／＼迫つて感じ出すのです。けれどもその人は模造の

革で慥<sup>こしら</sup>へて、その表面にエナメルを塗り、指で弾<sup>はじ</sup>くとばかくと味気ない音のする皮膚で以て急に鎧<sup>よろ</sup>はれ出した気がするのです。私の魂はどこか入口はないかとその人の身体のまはりを探し歩くやうです。苦しく切ない稲<sup>いな</sup>妻<sup>なずま</sup>がもぬけの私の身体の中を駆け廻り、ところ／＼皮膚を徹して無理な放電をするから痛い粟<sup>あわ</sup>粒<sup>つぶ</sup>が立ちます。戸惑<sup>とまど</sup>つた私の魂はとき／＼その人の唇<sup>くちびる</sup>とか額<sup>ひたい</sup>とかに向つても打ち当つて行くやうです。アーク燈に弾ね返される夜の蟬<sup>せみ</sup>のやうに私の魂は滑り落ちてはにじむやうな声で鳴くやうです。

私は苦しみに堪へ兼ねて必死と両手を組み合せ、わけの判らない哀願の言葉を口の中で咏<sup>つぶや</sup>きます。けれどもその人は相変らず身

体をしやんと立て、細い眼の間から穏かな瞳を私の胸に投げたまゝ  
殆ど音の聞えぬ楽器を奏でてゐます。私の魂は最後に、その人の  
胸元に向つて牙きばを立てます。噛み破ります。

ふと、気がつくと、私は首尾よくその人の中に飛び込めて、川  
に融け合つたやうです。川はもう見えません。私自身が川になつ  
たのでせうか。何だか私には逞たくましい力が漲り、野のどこへでも  
好き放題に流れて行けさうです。明るくて強い匂ひが衝つき上げる  
やうな野です。もう私の考へには嫁入り苦勞も老先おいさきもないので  
す。

いま男の誰でもが私に触つたら、ぢりゝと焼け失せて灰になり  
ませう。そのことを誰でも男たちに知らせたいです。だのにその

人は、もとの儘まま、しづかに楽器を奏でてゐます。ただ今度の私は、大仏の中に入った見物人のやうに、その人を内側から眺めるだけです。楽器の音が初めて高く聞えます。それは水の瀬々らぎのやうな楽しい音です。私はそこからまた再びもとの自分に戻るのに、また一苦勞です。海山の寂しさを越えねばなりません。

しかし私に取つてかういふ奇蹟きせき的な存在の人が、世間では私の母の廉やすい仕立ものゝお得意さまであつて、現在、製菓会社の下級社員で、毎日ビスケットを市中に届けて歩き、月給金〇〇円の方であるとは、どうにも合点がてんがゆきませんです。







# 青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成10 岡本かの子」国書刊行会

1992（平成4）年1月23日初版第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第四卷 小説」冬樹社

1974（昭和49）年3月18日

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：湯地光弘

2004年5月11日作成

2016年1月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 愛

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>